

史跡旧二条離宮（二条城）

2025年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡旧二条離宮（二条城）

2025年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をととして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、二条城本丸御殿易操作性1号消火栓整備に伴う史跡旧二条離宮（二条城）の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

令和7年3月

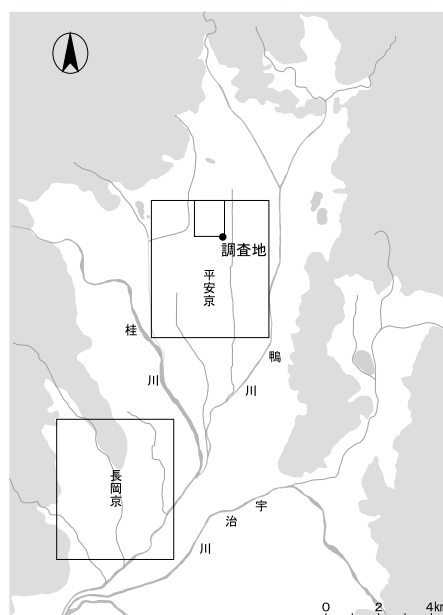
公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 史跡旧二条離宮（二条城） |
| 2 調査所在地 | 京都市中京区二条通堀川西入二条城町541番地（二条城敷地内） |
| 3 委 託 者 | 京都市 代表者 京都市長 松井孝治 |
| 4 調査期間 | 2024年12月16日～2025年1月17日 |
| 5 調査面積 | 17.1㎡ |
| 6 調査担当者 | 樋口武志 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「聚楽廻」・「壬生」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 本書作成 | 樋口武志 |
| 13 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員が当たった。 |
| 14 協力者 | 調査・整理作業にあたり、元離宮二条城事務所の来本雅之氏・曾根義雅氏から種々のご教示を頂いた。記して謝意を表します。 |

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	4
(1) 歴史的環境と立地	4
(2) 既往の調査	5
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 1 区の遺構	8
(3) 2 区の遺構	9
4. 遺 物	10
(1) 遺物の概要	10
5. ま と め	11

図 版 目 次

図版 1	遺構	1 区実測図 (1 : 40)
図版 2	遺構	2 区実測図 (1 : 40)
図版 3	遺構	1 1 区全景 (東から) 2 1 区北全景 (東から)
図版 4	遺構	1 1 区礎石 1・3 (南東から) 2 1 区瓦列 5 (南西から)
図版 5	遺構	1 2 区全景 (西から) 2 2 区石列 11 (西から)
図版 6	遺構	1 2 区暗渠 12 (北東から) 2 2 区暗渠 12 内部状況 (調査区南側集水桝より撮影)

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：400）	2
図3	1区調査前全景（南西から）	3
図4	2区調査前全景（北西から）	3
図5	作業状況（南西から）	3
図6	1区北半遺構保護状況（北東から）	3
図7	1区南半遺構保護状況（北西から）	3
図8	2区遺構保護状況（北から）	3
図9	1区埋戻し状況（北西から）	3
図10	2区埋戻し状況（北東から）	3
図11	本丸内既往調査位置図（1：1,000）	5
図12	基本層序柱状図（1：10）	7
図13	1区礎石断面図（1：40）	8
図14	寛永期絵図と調査位置（1：1,000、1：100）	12

表 目 次

表1	遺構概要表	8
表2	遺物概要表	10

史跡旧二条離宮（二条城）

1. 調査経過

本調査は、二条城本丸御殿易操作性1号消火栓整備に向けた埋蔵文化財発掘調査である。二条城では、平成23年度（2011）から本丸御殿の修復を行っており、修復が完了した令和6年度から一般公開を再開した。これを機に易操作性1号消火栓の設置工事が計画された。今回の調査は、易操作性1号消火栓の設置候補地における遺構の遺存状況を明らかにすることを目的とした。発掘調査は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室元離宮二条城事務所（以下、「二条城事務所」という）から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

調査区の設定は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）の指導に従い2箇所で行った。本丸御殿の御書院・四季の間などがある建物の東に1区（11.7㎡）、玄関と雁の間・台所を繋ぐ廊下の北側に2区（5.4㎡）を設定した。調査面積は合計で17.1㎡である。

調査は令和6年12月16日から開始した。調査の結果、1区では江戸時代後期の瓦列、江戸時代前期の礎石4基を検出した。2区では近代の石組み暗渠、江戸時代後期の石列を検出した。また、2区の調査は、調査開始時点で消火栓基礎の設置範囲が確定した。そのため、消火栓の設置範囲で

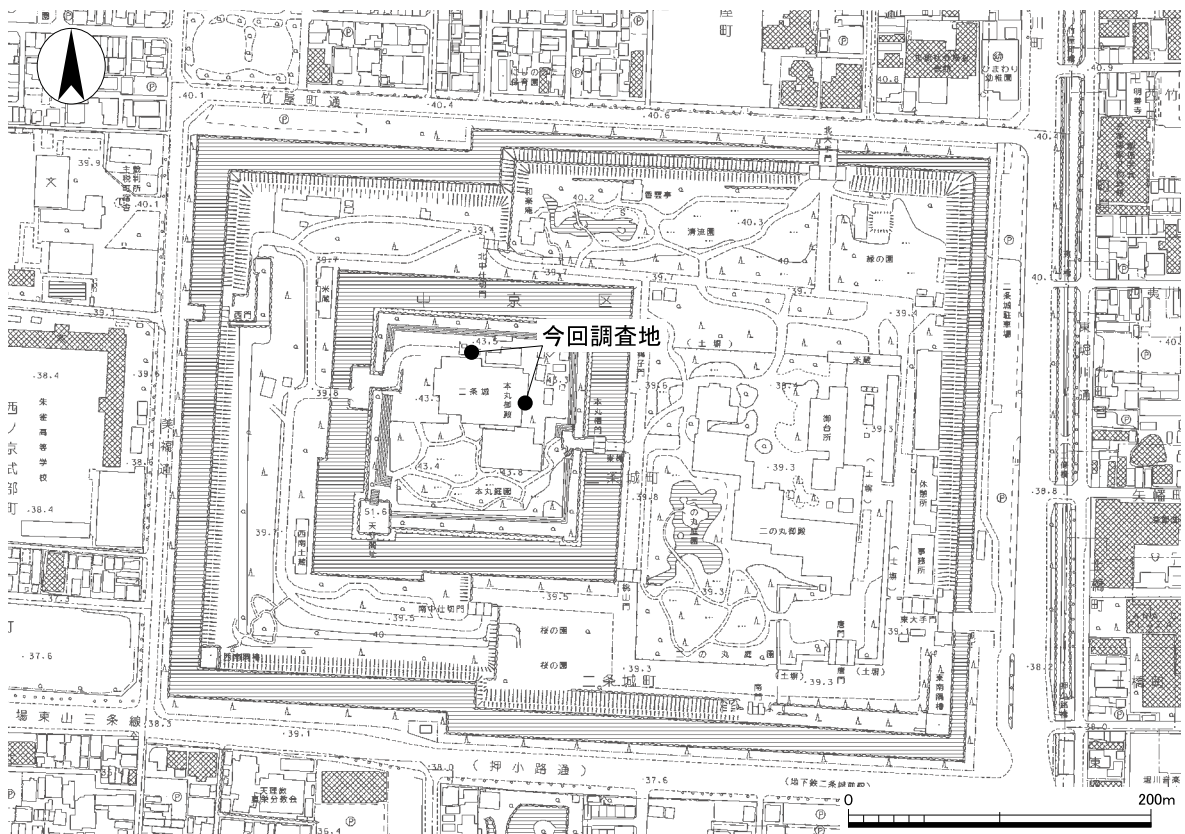


図1 調査位置図（1：5,000）

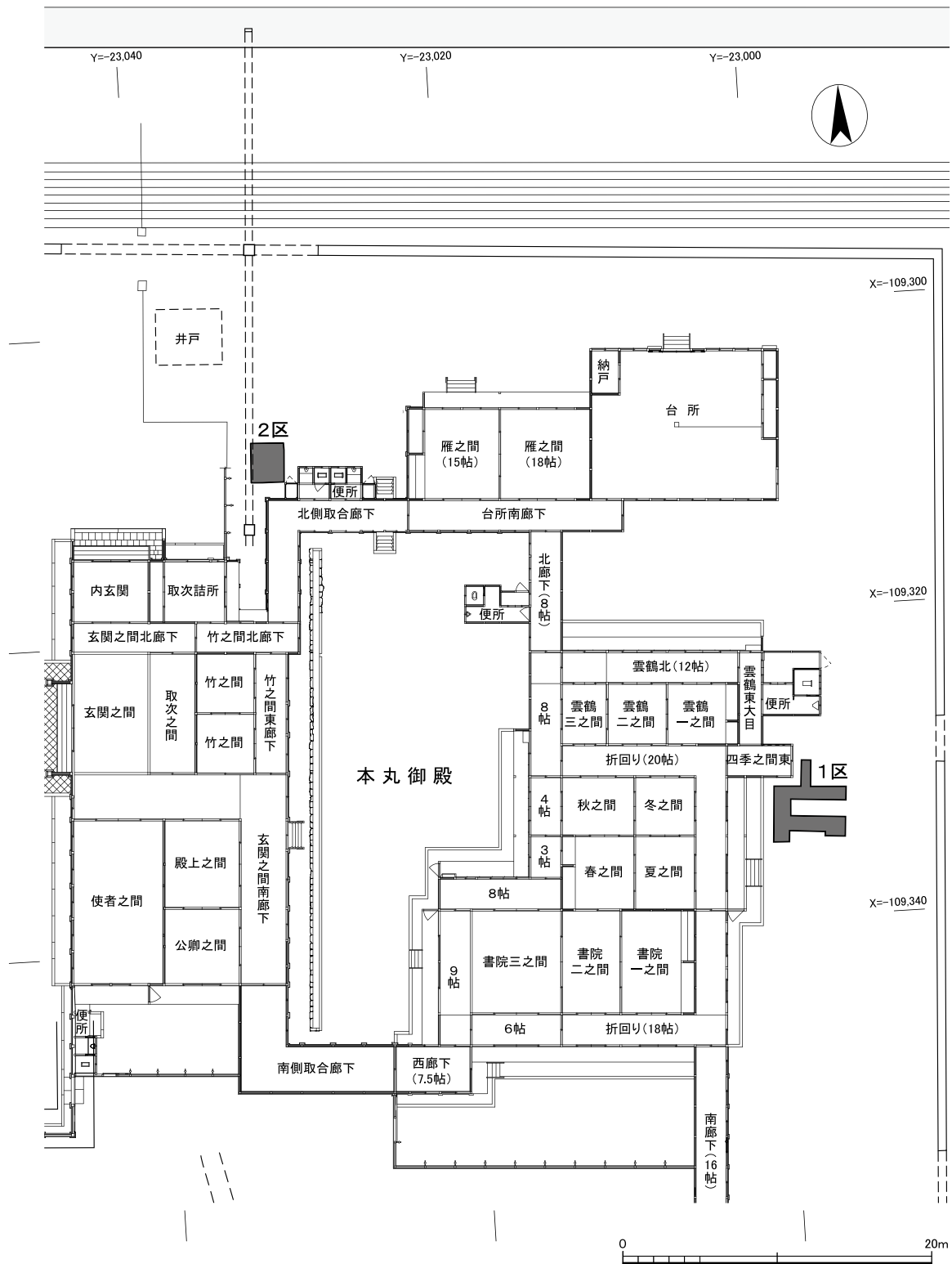


図2 調査区配置図 (1:400)

財団法人建築研究協会一級建築士事務所作成の本丸御殿平面図 (一部抜粋) に今回調査区を配置

ある北半部の調査を行い、南半部は表面検出のみに止めた。調査終了後に、1区は検出した遺構と設備設置箇所を土嚢で養生を行い、埋め戻した。2区は石列と遺構面を土嚢と保護砂で養生を行い、暗渠は不織布で目地を詰めて埋め戻した。令和7年1月17日に調査を終了した。

調査中は適宜、二条城事務所と文化財保護課との協議や文化財保護課による検査を受けた。

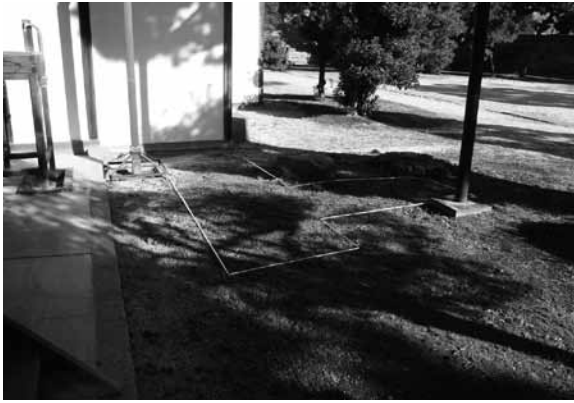


図3 1区調査前全景（南西から）



図4 2区調査前全景（北西から）



図5 作業状況（南西から）



図6 1区北半遺構保護状況（北東から）



図7 1区南半遺構保護状況（北西から）



図8 2区遺構保護状況（北から）



図9 1区埋戻し状況（北西から）



図10 2区埋戻し状況（北東から）

2. 位置と環境

(1) 歴史的環境と立地

二条城は、徳川家康により慶長7年(1602)から造営が開始され、翌年に完成した。この時期の二条城は、高岡市勝興寺蔵『洛中洛外図屏風』などに見ることができる。縄張は単廓式で、方形の堀が一重に張り巡らされており、東の堀川通と北の竹屋町通に大手門を構え、東大手門が正面となっている。本丸は現在の二の丸御殿の位置に置かれ、5層の天守を備えていることがわかる¹⁾。

寛永元年(1624)からは後水尾天皇の行幸に備え、徳川秀忠・家光による大規模な改築が行われた。城域は西へと拡張され、旧域の西の堀を中軸とした150m四方の新たな本丸が設けられた。この改築によって縄張は、本丸部分を二の丸で取り囲む輪郭式の城となり、現在の二条城の縄張となった。本丸には秀忠の宿所となる御殿や堀・石垣が設けられ、南西部の天守台には伏見城天守が移築された。また同時に二の丸御殿・庭園も改修が行われた。二の丸御殿の南西側には行幸御殿が新築され、各殿舎には狩野探幽をはじめとした狩野派一門の障壁画が描かれた。寛永3年(1626)には後水尾天皇の二条城への行幸が行われた。この行幸は大規模に執り行われ、内裏から出発した行列の先頭が二条城に到着しても、最後尾は内裏にいたとされる。この時の上洛の後、徳川家茂が入城するまでの間、将軍が二条城に入城することはなく、本丸・二の丸御殿の一部は取り壊された²⁾。

寛延3年(1750)には落雷による天守の消失、天明8年(1788)には火災により本丸御殿や隅櫓など多くの建物が焼失する。この火災後、本丸部分は取り壊され再建は行われなかったことが「二条御城中絵図」³⁾に図示されている。これ以降二条城は衰微していくこととなる

幕末に入ると、文久3年(1862)の徳川家茂の入城から慶応3年(1865)の徳川慶喜の大政奉還までの期間で再整備が行われた。本丸には仮御殿が建設され、二の丸の全面修復や番衆小屋の建設などが行われた。

明治維新以降は太政官代・京都府庁が置かれ、明治6年(1873)陸軍省の所管に移される。明治17年(1884)には宮内省所管の「二条離宮」となり、皇室の離宮や迎賓館的な役割となる。明治18年(1885)に京都府庁が移転し、二の丸御殿の修理が行われた。明治26年(1893)に明治天皇の意向により、京都御苑の今出川門脇にあった旧桂宮邸の御殿群を本丸へ移築し、翌年に落成した。大正4年(1915)に大正天皇の即位礼に伴う再整備が行われ、二条城の南門が造られた。

昭和14年(1939)に二条城は京都市に下賜され、翌年に恩賜元離宮二条城として一般公開される。昭和27年には文化財保護法の制定により、二の丸御殿6棟が国宝に、東大手門など22棟が重要文化財として登録され、昭和28年(1953)には二の丸庭園が特別名勝に指定された。その後、平成8年(1994)、『古都京都の文化財』のうちのひとつとして二条城(元離宮二条城)が世界文化遺産に登録された。

(2) 既往の調査 (図11)

二条城では、これまで多数の調査が行われているが、ここでは本丸内の主要な調査について概要を記す。

調査1は、1980年に実施された防災施設設置工事に伴う立会調査である。江戸時代の瓦溜・石列・礎石・石組溝などを検出している。⁴⁾

調査2は、2010年に実施された防災施設設置工事に伴う立会調査である。寛永元年の増改築に係る整地土・土坑・石列、天明の大火で焼失した建物の礎石や基礎、天明の大火後の整地土などを検出している。⁵⁾

調査3は、2009年に実施された防災・防犯施設設置工事に伴う確認調査である。寛永元年の増改築に係る整地土・溝・土坑・柱穴・礎石列・集石、天明の大火による火災層などを検出して

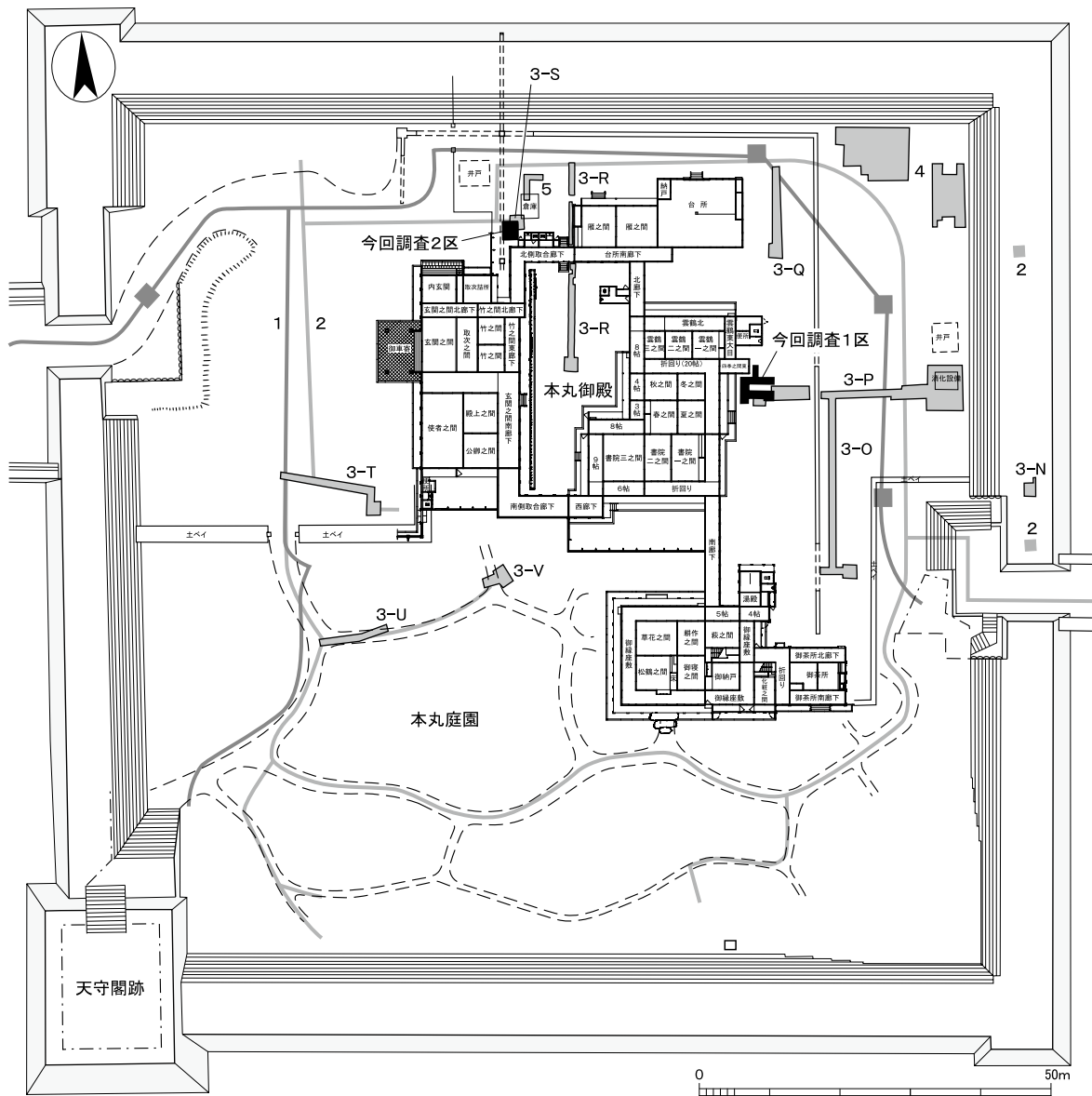


図11 本丸内既往調査位置図 (1 : 1,000)

いる。寛永元年の増改築に伴う造成土は、二の丸御殿と現地表面の高低差からすると3 m以上に及ぶと考えられ、本丸御殿の造営が極めて大規模な工事であったことが明らかとなった。⁶⁾なお今回の調査は、1区が2009年度調査のP区、2区が2009年度調査のS区と一部が重複している。

調査4は、2021年に実施された本丸御殿公開整備に伴う発掘調査である。江戸時代前期の建物・礎敷遺構・柱穴列・土坑、江戸時代末期の土坑・埋甕、明治時代の土坑を検出している。⁷⁾

註

- 1) アデアック「高岡市雲龍山勝興寺 文化財デジタルアーカイブ 洛中洛外図 左隻」
<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11F0/WJJS07U/1620295100/1620295100200010/mp000010>
(参照 2025-03-11)
- 2) 今回の調査成果を検討する上で参考した絵図は、『史跡旧二条離宮（二条城）保存活用計画』2020年に掲載されているが、細かい文字や表現など確認する際に「京都大学貴重史料デジタルアーカイブ」も参照した。
「京都大学貴重史料デジタルアーカイブ 二条城関係資料」
<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/collection/nakai/nijojo> (参照 2025-03-11)
- 3) 「二条御城中絵図」陽明文庫所蔵
- 4) 「表2 昭和54年度試掘・立会調査一覧表－8」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 5) 2010年の立会調査については未報告。以下の報告書に成果概要が記される。
近藤章子・モンペティ恭代・吉崎 伸「表1 周辺調査一覧表－16」『史跡旧二条離宮（二条城）・平安宮跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016－19 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年
- 6) 山本雅和『史跡旧二条離宮（二条城）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009－15 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 7) 岡田麻衣子『史跡旧二条離宮（二条城）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021－12 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2022年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図12)

1 区の基本層序

調査区南半の北壁 Y=-22,996.5 付近では、現地表面から -0.08 m で江戸時代末期の整地層、-0.26 m で江戸時代後期の整地層、-0.41 m で江戸時代前期の整地層となる。江戸時代前期の整地層の認定は、2009 年度調査成果に基づく。同層には焼土を含まない。一方でこの江戸時代前期の整地層上面には焼土の混じる層があり、焼瓦を含む。文献から二条城内の建物が天明 8 年 (1788) の大火によって焼失したことが明らかとなっており、焼土と焼瓦はこれに伴うものと考えられる。

2 区の基本層序

調査区の南壁 Y=-23,032 付近では、現地表面から -0.02 m で江戸時代末期の整地層、-0.36 m で江戸時代後期の整地層となる。

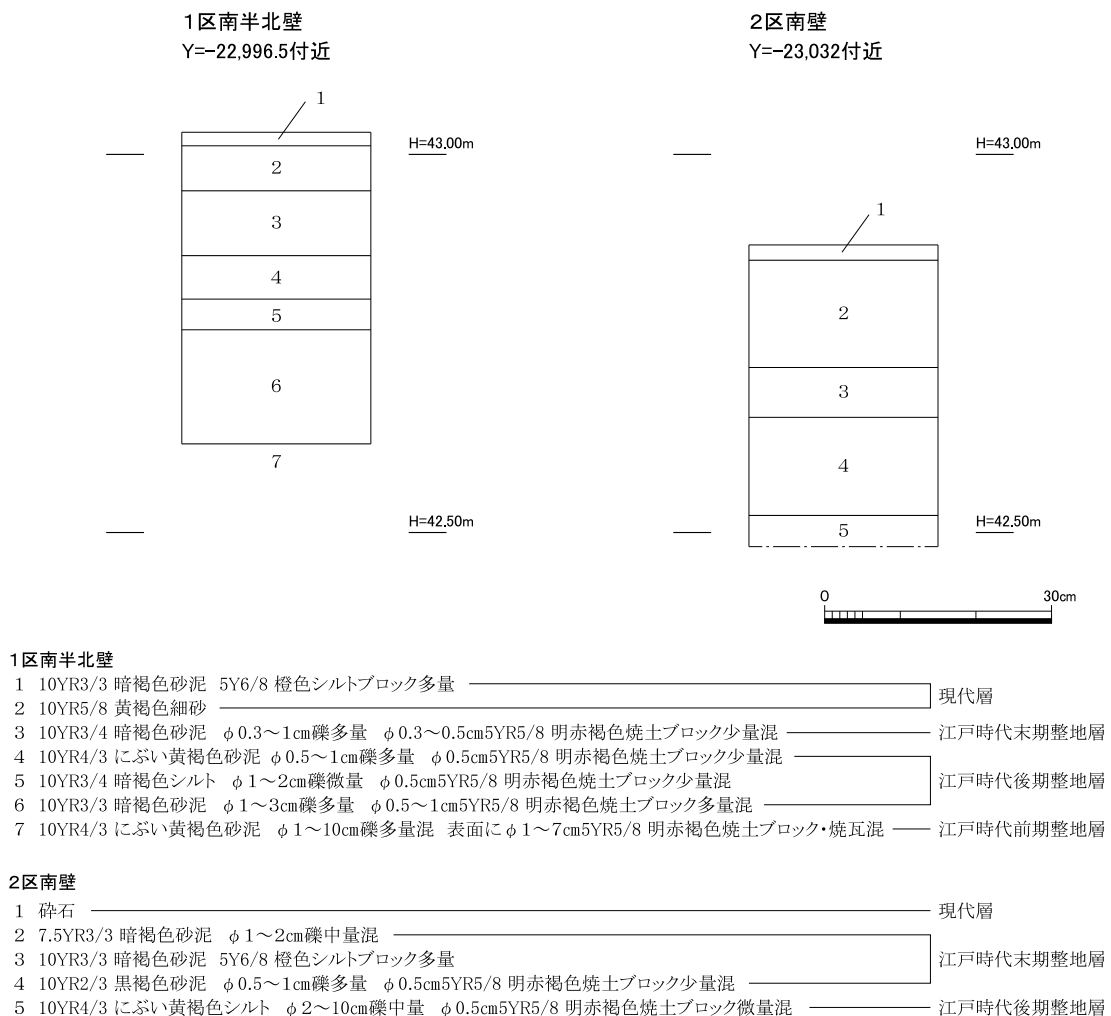


図12 基本層序柱状図 (1:10)

(2) 1区の遺構（図版1・3）

江戸時代前期

礎石1～4（図13、図版4） 礎石1は調査区北西隅で検出した。大きさは、南北長0.47m、東西幅0.31m以上である。礎石2は調査区北東隅で検出した。大きさは、南北長0.78m、東西幅0.5mである。礎石3は調査区南西で検出した。大きさは、南北長0.29m、東西幅0.33m以上である。礎石4は調査区南東隅で検出した。大きさは、南北長0.66m、東西幅0.57mである。礎石4は2009年度調査P区で検出している石86と同一のものである。¹⁾ 礎石2・4は東面がそろえられている。柱間の距離は、南北約2.3m、東西約3.9mである。礎石には矢穴痕が残っているものがあり、礎石3の北面に1箇所、礎石4の東面に3箇所の矢穴痕が見られる。礎石3の矢穴の大きさは幅約7.3cm、深さ約5.5cmである。礎石4の矢穴の大きさは、平均して幅約7.8cm、深さ4.0cmである。

江戸時代後期

瓦列5（図版4） 調査区南部で検出した。検出規模は南北0.6m、東西0.07m。角棧切落目板瓦を南北方向に立て並べている。掘形はなく整地層中で検出した。

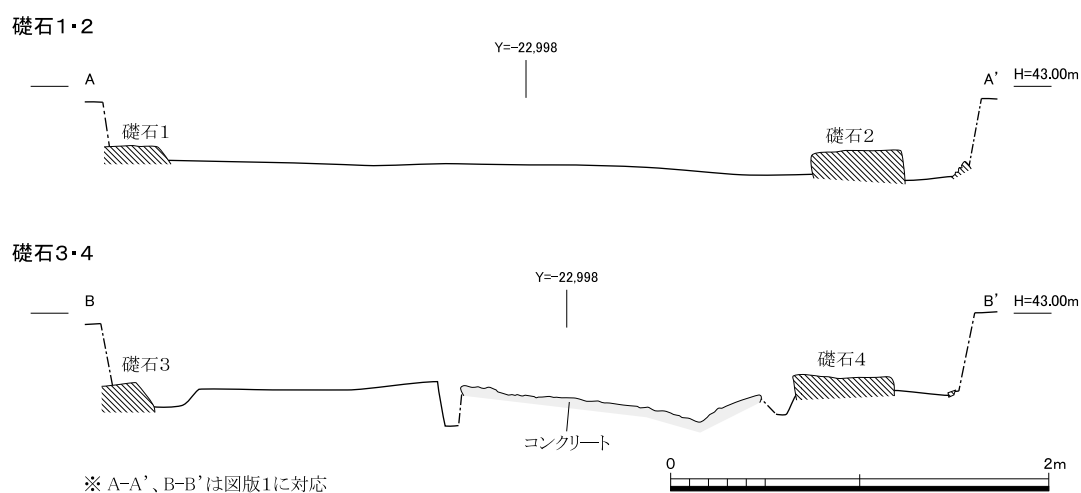


図13 1区礎石断面図（1：40）

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
江戸時代前期	礎石1～4	
江戸時代後期	瓦列5、石列11	
近代	暗渠12	

(3) 2区の遺構（図版2・5）

江戸時代後期

石列11（図版5） 調査区北東部で検出した。検出規模は南北1.5m、東西0.3mである。2009年度調査S区で確認した石組溝27の西肩石にあたる²⁾。今回の調査では新たに中央の石の下と南に石を検出した。新しく検出した石の西面が揃えられていることから、西側が正面と考えられる。また石列を構成する石の天面は南北で高低差があり、南端の石が最も低い。

近代

暗渠12（図版6） 調査区西端で検出した。花崗岩の切石で組まれた石組の暗渠である。検出規模は南北2.5m、東西0.5m、深さ0.5mである。暗渠の内法は距離0.32m以上、幅0.46m、高さ0.34mである。暗渠に使われている石は、暗渠の内側部分にあたる面を平滑にしている。石組の外面は一部がコンクリートで目詰めされており、調査区内で塩化ビニール製の排水管が接続されている。本丸内の雨水などを内堀へ排水する暗渠であり、現在も機能している。

註

- 1) 山本雅和『史跡旧二条離宮（二条城）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-15 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 2) 1)に同じ。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

今回の調査では、整理コンテナにして4箱の遺物が出土した。出土した遺物は、土器類、瓦類、金属製品がある。その大部分は瓦類が占める。出土遺物の時期は江戸時代である。図化できる遺物はない。

土器類は施釉陶器・染付磁器の小片が数点出土した。

瓦類は軒丸瓦・丸瓦・平瓦が出土した。

金属製品は釘などが出土した。

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Aランク 未掲載箱数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
江戸時代	施釉陶器、染付磁器、瓦類、 金属製品					
合 計		4 箱	0 点 (0 箱)	4 箱	0 箱	0 箱

5. ま と め

今回の調査では、江戸時代前期の建物礎石、江戸時代後期の瓦列・石列、近代の暗渠などを検出した。

1区では礎石1～4、瓦列5を検出した。礎石4は2009年度調査の石86と同一であり、江戸時代前期整地層で成立することが明らかとなっている。礎石1～3も、同じく江戸時代前期の整地層上面で検出したことから、これらは同時期の建物の礎石と考えられる。礎石2・4は東側の面を揃えており、建物の東面と揃えられている。礎石1・3は、礎石2・4に比べて礎石の規模が小さいことから、建物内部の束石と考えられる。江戸時代前期の建物は『行幸御殿其外古御建物并當時御有形御建物共 二條御城中繪圖』¹⁾に、寛永3年(1626)の後水尾天皇行幸時の本丸御殿が描かれている。今回検出した礎石は、坊主部屋の東面に位置する。

瓦列5は、江戸時代後期の整地層で検出した。角棧切落目板瓦を立て並べており、塙列建物の²⁾可能性が考えられる。

2区では石列11と暗渠12を検出した。石列11は、2009年度の調査で石組溝27の西肩石として検出した石列である。今回新たに南側に1石、中央部の石の下に1石検出し、石列の西面を揃えていること、石列の石の上面に南北で高低差があることが確認された。石組溝ではなく、建物の基壇状高まりの西辺と考えられる。

暗渠12は、本丸内の雨水等を排水する施設である。主に花崗岩で組まれており、目地詰めにはコンクリートが用いられている。この暗渠は現在も機能している。

主要参考文献

『史跡旧二条離宮(二条城)保存活用計画』京都市文化市民局元離宮二条城事務所・京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 2020年

註

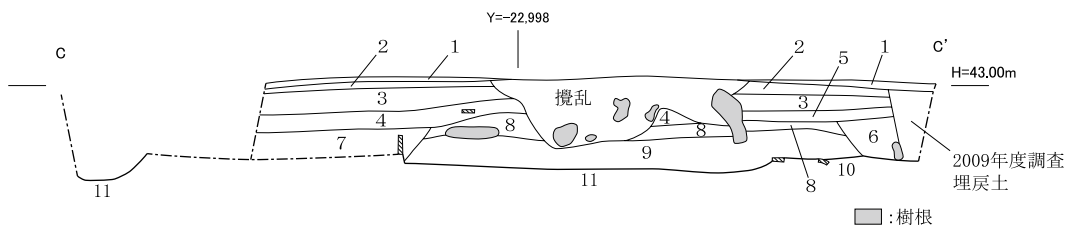
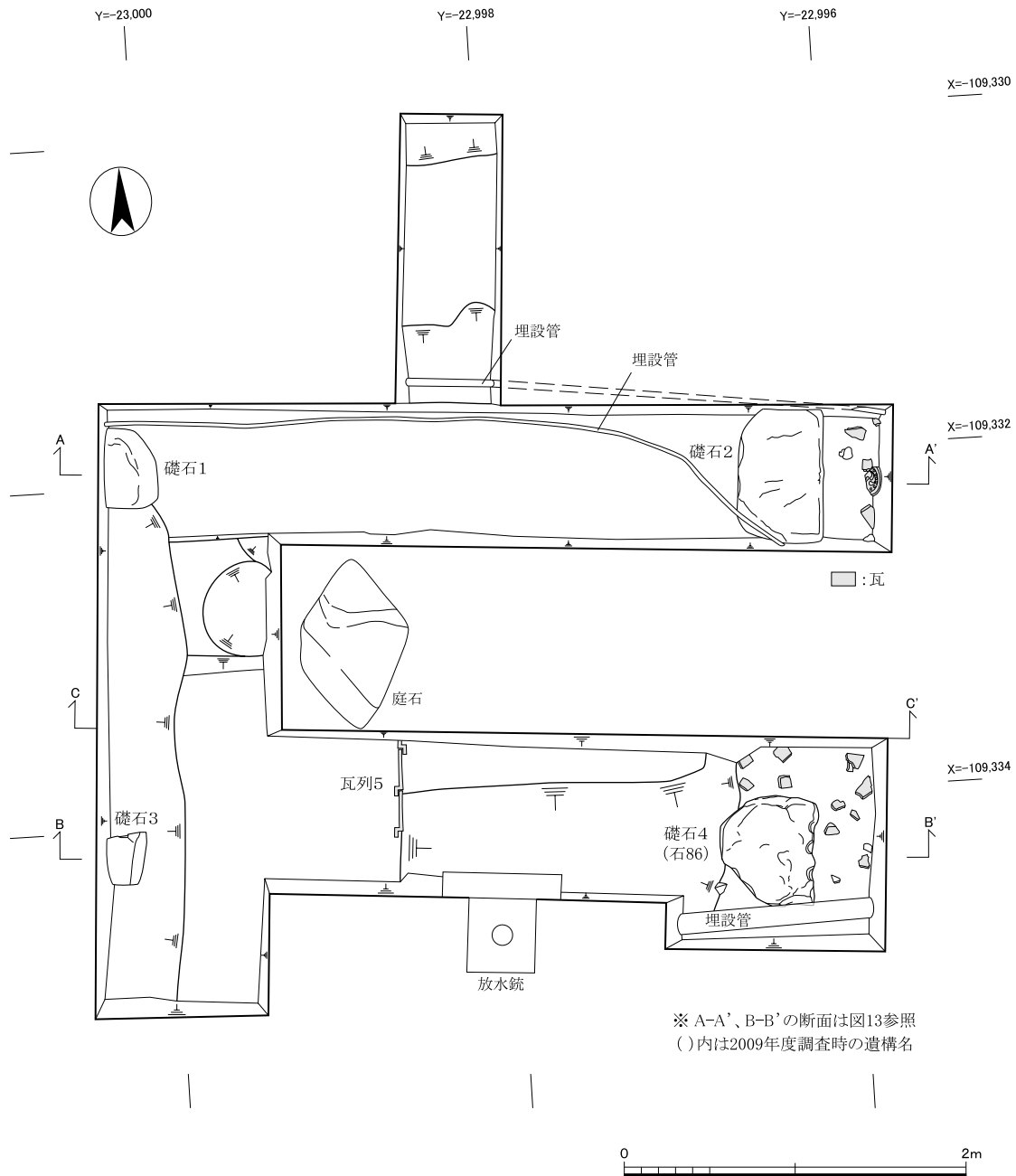
- 1) 今回の調査成果を検討する上で参考した絵図は、『史跡旧二条離宮(二条城)保存活用計画』2020年に掲載されているが、細かい文字や表現など確認する際に「京都大学貴重史料デジタルアーカイブ」も参照した。

「京都大学貴重史料デジタルアーカイブ 二条城関係資料」

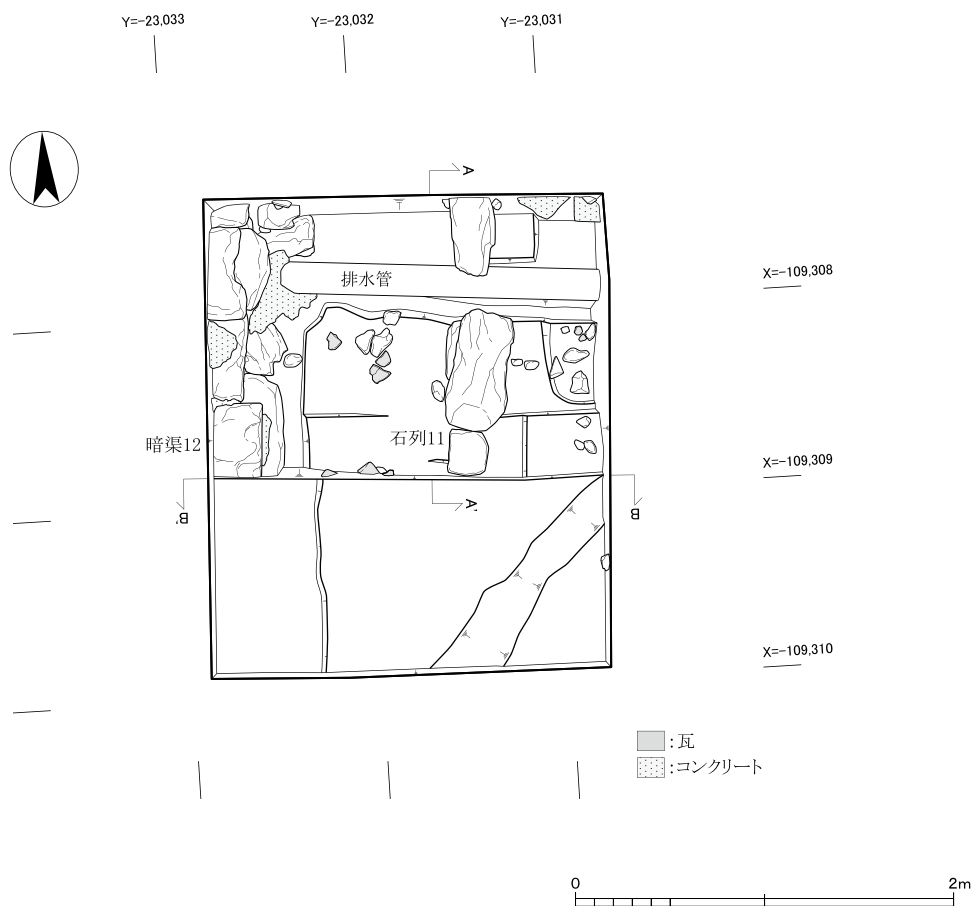
<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/collection/nakai/nijojo> (参照 2025-03-11)

- 2) 土山健史「塙列建物について」『関西近世考古学研究Ⅲ』関西近世考古学研究会 1992年

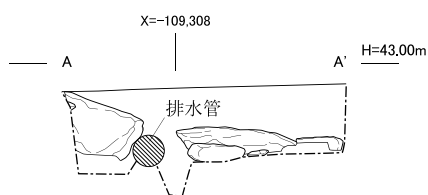
図 版



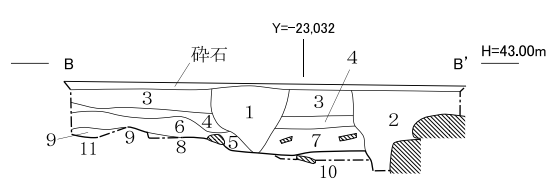
- | | |
|--|-----------|
| 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 5Y6/8 橙色シルトブロック多量 | 現代層 |
| 2 10YR5/8 黄褐色細砂 | |
| 3 10YR3/4 暗褐色砂泥 φ 0.3~1cm礫多量 φ 0.3~0.5cm5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック少量混 | 江戸時代末期整地層 |
| 4 2.5YR3/2 黒褐色砂泥 φ 0.5~1cm礫少量 φ 5cm礫微量 φ 0.5~2cm5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック中量混 | |
| 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 φ 0.5~1cm礫多量 φ 0.5cm5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック少量混 | |
| 6 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 江戸時代後期整地層 |
| 7 2.5YR3/3 暗オリーブ褐色砂泥 φ 1~3cm礫少量 φ 0.5~1cm5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック中量混 | |
| 8 10YR3/4 暗褐色シルト φ 1~2cm礫微量 φ 0.5cm5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック少量混 | |
| 9 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ 1~3cm礫多量 φ 0.5~1cm5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック多量混 | |
| 10 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 φ 1~10cm礫多量混 表面にφ 1~7cm5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック・焼瓦混 | 江戸時代前期整地層 |
| 11 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 φ 1~10cm礫多量混 | |



石列11立面図



南壁断面図



- | | | | | |
|----|-------------------|-------------------------------------|---------------------------------|-----------|
| 1 | 10YR3/4 暗褐色砂泥 | φ 5cm10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック微量 | 5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック焼土中量混 | 近代以降 |
| 2 | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 | φ 0.5~1cm礫多量 | 5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック少量混(暗渠掘形) | |
| 3 | 7.5YR3/3 暗褐色砂泥 | φ 1~2cm礫中量混 | | 江戸時代末期整地層 |
| 4 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 5Y6/8 橙色シルトブロック多量 | | |
| 5 | 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 | | | |
| 6 | 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 | φ 0.3~1cm礫多量 | φ 0.3~0.5cm5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック少量混 | |
| 7 | 10YR2/3 黒褐色砂泥 | φ 0.5~1cm礫多量 | φ 0.5cm5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック少量混 | 江戸時代後期整地層 |
| 8 | 10YR3/4 暗褐色シルト | φ 0.5~1cm礫多量 | φ 2~7cm礫少量 | |
| | | φ 0.5cm5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック多量混(石列11掘形) | | |
| 9 | 10YR4/4 褐色シルト | φ 1~2cm礫微量 | φ 0.5cm5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック中量混 | |
| 10 | 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト | φ 2~10cm礫中量 | φ 0.5cm5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック少量混 | |
| 11 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | φ 1~4cm礫多量 | | |



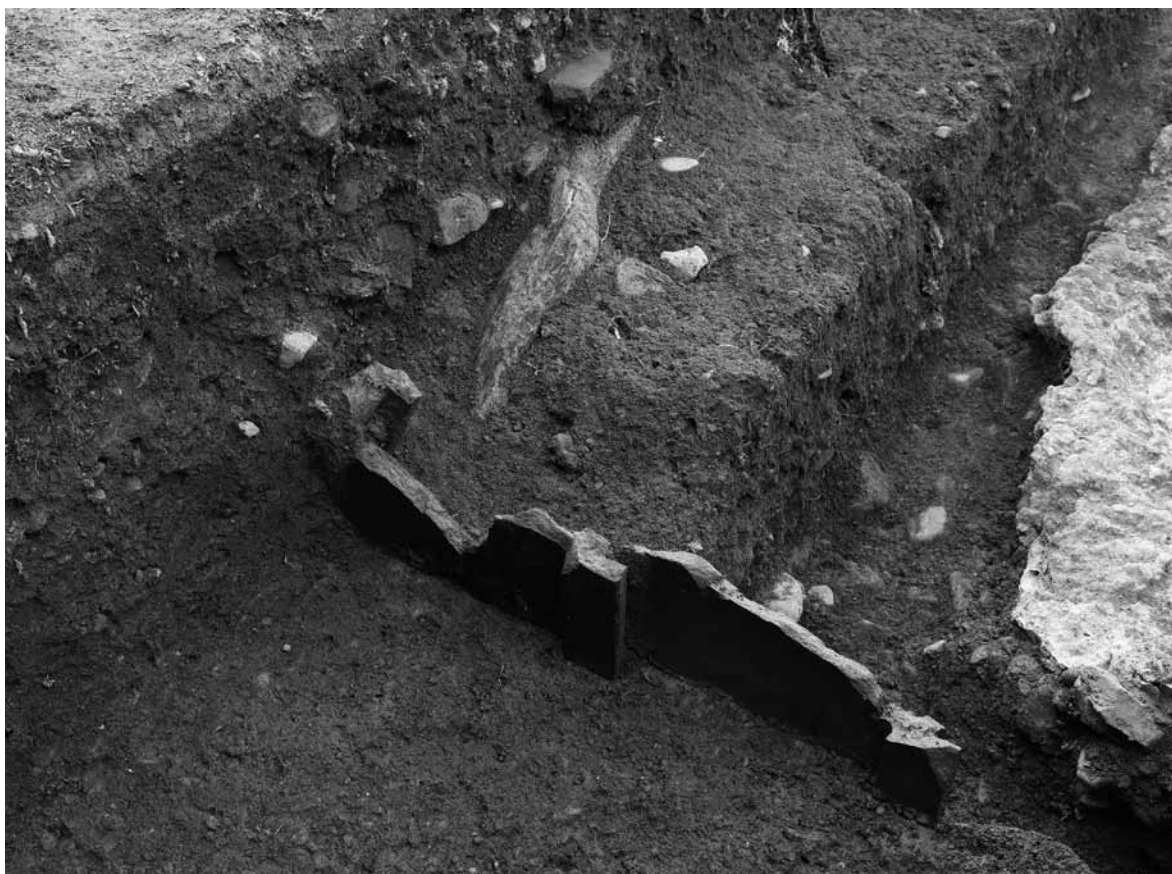
1 1区全景（東から）



2 1区北全景（東から）



1 1区礎石1・3（南東から）



2 1区瓦列5（南西から）



1 2区全景（西から）



2 2区石列11（西から）



1 2区暗渠12（北東から）



2 2区暗渠12内部状況（調査区南側集水桝より撮影）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しせききゆうにじょうりきゆう（にじょうじょう）							
書 名	史跡旧二条離宮（二条城）							
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2 0 2 4 - 4							
編 著 者 名	樋口武志							
編 集 機 関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所 在 地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発 行 所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2025年 3 月31日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせききゆうにじょうりきゆう 史跡旧二条離宮 (にじょうじょう) (二条城)	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にじょうどおりほりかわにしている 二条通堀川西入 にじょうじょうちょう 二条城町541 ばんち 番地	26100	A453	35度 00分 51秒	135度 44分 52秒	2024年12月 16日～2025 年 1 月17日	17.1㎡	本丸御殿 易操作性 1 号消火 栓整備
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
史跡旧二条離宮 (二条城)	史跡	江戸時代		礎石、石列、瓦列		施釉陶器、染付磁器、 瓦類、金属製品		江戸時代前期の礎 石を検出した。
		近代		暗渠				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2024-4

史跡旧二条離宮（二条城）

発行日 2025年3月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273番地
〒602-8358 TEL 075-467-5151